

白山ふるさと文学賞

第二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈母へのおもいに関する作文〉

小学生高学年の部 最優秀賞

お母さんの声

千代野小学校六年

清水 しみず

麻衣 まい

受賞の言葉

この作文を通して、改めてお母さんに対する素直な気持ちを見つめ直すことができました。よかったです。これからもお母さんとの会話を楽しんで、笑顔で過ごしていきたいです。本当にありがとうございました。

わたしにとってお母さんはどのような存在だろうかと考えてみました。そして、安心できる場所ではないかと思えました。学校から帰ってきたときなど、家にお母さんがいるという空気にホッとして、一気に心が安らぐような気がします。それからお母さんが夕食を作り始めると、そのいいにおいにいやされて、そして食べたときには元気が出て、笑顔になるのです。また、水泳の練習が終わると、車で待っているお母さんのもとへ急ぎますが、やはりそんな時も「ただいま。」と言って乗りこんだしゅん間、ホッとした気持ちになります。体はつかれているのだけれど、心はおだやかになります。こんな風にお母さんのいる場所こそが、わたしにとって安らぎの空間なのだと思います。

わたしがお母さんとこんな風な関係が築けるのも、ふだんからよく会話をするからだだと思います。学校での出来事は何でもよく話します。お母さんはいそがしくてもよく聞いてくれます。楽しかったことやうれしかったことを聞いてもらおうと、なんだか喜びも増えるような気がします。逆にいやなことやつらいことを打ち明けると、聞いてもらってすっきりするし、何かちよつとしたことを言ってもらうだけで気分が晴れます。また、わたしが一步をふみ出せないでいると、アドバイスをしてくれてドンと背中をおしてくれれます。そのおかげでわたしは勇氣や自信を持って何かをスタートさせることができます。そんなことをくり返すなかで、お母さんはわたしのことを何でも知っています。わたし自身よりもわたしのことを分かっているのだと思います。そのせいか、わたしのだめなところや悪いところをおこったり、しかつたりするときでも、「まあ、そこがきちんとできたら麻衣じゃないね。できないから麻衣なんだよね。」と言い出して、いつのまにか終わってしまうことがありません。結局、少しづつ良くなるように教えてくれたり、おうえんしてくれたり、静かに見守っていたりします。わたしはいつもそんな気持ちを感じてがんばっていきけるのだと思います。

こんなお母さんに心配をかけてしまう出来事がありました。それはわたしが骨の病気になってしまったことです。そのとき、お母さんはわた

しに言いました。

「なつてしまったものはしょうがない。これ以上悪くならないようにしないとね。別に麻衣の大事なものがうばわれるわけでもないんだから。麻衣は何も変わらない。大丈夫。」

本当にその通りだと思いました。特に原因のない病気なので、だれが悪いというわけではありません。それに水泳のことや学校生活のことなど、今まで通りでよいと言われ、何も制限されてはいません。ただわたしがすぐに受け入れられないものだから、それを思ってはげましてくれただと思います。お母さんは少しでも良くなるようにいつも考えてくれるようになります。お母さんはもつと早く病気に気がつけばよかったなどとは決して言いません。それよりも、これからわたしがこの病気とうまく向き合って生活していけるように、よくなる努力をわたしができるように支えてくれます。そんなお母さんは今まで見てきたお母さんとは少しちがっています。とにかくかきたのもしいと思える存在です。

こうやってお母さんは、わたしのためにいつも何かしてくれているのです。わたしはお母さんに手助けしてもらったり、はげましの言葉ももらったり、たくさんのもをもらって過ごしています。だまっけてもいろんなことをしてくれていて、そしてそれがいつの間にか当たり前みたいな感覚になっていて、ついつい「ありがとう。」の言葉をわすれてしまうこともあります。けれど、だれかの世話をすることは大変なことです。自分がやろうと思ってもなかなかできません。私がお母さんからもらっている全部をまとめて考えてみると、それは「愛情」なのだと思付きました。さらにお母さんからたくさん愛をもらっているからこそ、安心があるのだと分かりました。

そのことに心から感謝しなければならぬと思いました。いつもそばにいてくれることもおしみなく与えてくれることも決して当たり前なんかじゃなく、たくさんありがとうでお返ししないといけないんだなど強く感じています。